

1. 部門目標

千葉県保健医療計画において示された千葉市の地域小児科センターとしての役割を担うべく、小児救急拠点病院として充実を図り、小児総合診療の幅を拡大し地域の小児医療に貢献する。1) 内因系・外因系疾患を問わず、常時小児救急患者を受け入れる。2) 最善の医療のため多職種によるチーム医療を実践する。3) 健診（院内外）および予防接種の実施など小児保健診療へ参加する。4) 1次医療機関、3次医療機関、消防局、保健所、児童相談所、千葉市医師会など他の関連機関と円滑な連携をし、地域医療を支援する。5) 地域の小児食物アレルギー診療の基盤となるよう、食物経口負荷試験を実施していく。6) 小児科専門研修基幹施設として小児科専攻医を指導・育成する。7) 公開カンファレンスを開催して地域の小児医療の質向上に貢献する。8) 千葉大学病院総合診療科専攻医、初期研修医、千葉大学医学部学生などの研修施設としても充実を図る

2. 勤務体制とスタッフ

①勤務体制

常時小児科医が小児救急患者を受け入れる体制になっている。夜間、土、日、祝日は、日勤・夜勤の小児科医が割り当てられ、常時小児科医が在院する体制となっている。日中は救急当番の小児科医が迅速に対応をしている。17時から22時までの千葉市夜間応急診療を含む救急外来において、小児専従看護師による院内トリアージにより救急外来の適正化を図る。緊急性が高い患者は、平日はシフト勤務医師が対応し、日・祝日は小児科救急外来担当医師が対応する。平成30年2月より千葉市夜間応急診療の前準夜帯を週1回月曜日（第1月曜日を除く）に、平成31年2月より千葉市夜間応急診療の深夜帯を週1回水曜日に小児科専攻医・千葉大総合診療科専攻医が担当することになった。

②スタッフ

平成30年4月1日時点

| | |
|-------------|--------|
| 院長 | 寺井 勝 |
| 副院長・小児科統括部長 | 金澤 正樹 |
| 感染症内科部長 | 阿部 克昭 |
| 主任医長 | 杉田 恵美 |
| 主任医長 | 廣瀬 陽介 |
| 主任医長 | 加藤 いづみ |
| 主任医長 | 森山 陽子 |
| 医長 | 瀬戸 愛生 |
| 医長 | 小玉 隆裕 |
| 医長 | 光永 可奈子 |
| 医長 | 寺中 さやか |
| 医長 | 鋪野 歩 |
| 医師 | 仲村 あずさ |
| 医師 | 藤田 冴香 |
| 医師 | 高居 宏武 |
| 専攻医 | 山口 亮 |
| 専攻医 | 原木 悠 |
| 専攻医 | 近藤 丈太 |
| 専攻医 | 近藤 優帆 |
| 専攻医 | 李 宇 |

橋本祐至部長が平成 30 年 3 月で退職し、平成 30 年 5 月にうさびよんこどもクリニック（佐倉市）を開院した。平成 30 年 4 月に阿部克昭小児科部長が感染症内科部長に異動となった。森山陽子医師が平成 30 年 4 月に常勤医師として採用となり主任医長となった。瀬戸愛生医長が 5 月末で退職した。鋪野歩医長が小児科専門医を取得した。小児科専攻医が小児科専門研修のローテーションにより異動があった。

③外来（平成 30 年 4 月 1 日時点）

専門外来

月曜：地引利昭・松井拓也（循環器）、千葉大医師（内分泌）、武之内史子（小児外科）

火曜：橋本祐至（神経）、千葉大医師（神経）、阿部克昭（感染症）

光永可奈子・加藤いづみ（アレルギー）、小原由紀子（小児外科）

水曜：田邊雄三・高梨潤一（神経）

木曜：寺井 勝（循環器）、亀ヶ谷真琴（整形外科）、橋本祐至（神経）

金澤正樹（代謝・消化器）、千葉大医師（小児外科）

金曜：寺井 勝（循環器）、加藤いづみ（アレルギー）、小原由紀子（小児外科）

小児一般外来

石和田文栄、杉田恵美、廣瀬陽介、森山陽子、瀬戸愛生、小玉隆裕、平井 希

3. 診療実績

外来延べ患者数：20,212 人（初診：5,147 人、再診：15,065 人）、紹介患者数：2,029 人

新規入院患者数

| 新規入院患者数 | 27 年度 | 28 年度 | 29 年度 | 30 年度 |
|---------|-------|-------|-------|-------|
| 小児科 | 1,941 | 2,132 | 2,272 | 2,083 |

救急車搬送受入数

| | 27 年度 | 28 年度 | 29 年度 | 30 年度 |
|--------|-------|-------|-------|-------|
| 小児科 | 1,010 | 1,251 | 1,564 | 1,724 |
| 小児科夜急診 | 827 | 799 | 727 | 617 |
| 小児科総数 | 1,837 | 2,050 | 2,291 | 2,341 |

〈主な入院患者の疾患別内訳〉

食物経口負荷試験検査 730 件、急性肺炎、気管支喘息発作、急性細気管支炎、感染性胃腸炎、川崎病、尿路感染症、熱性けいれん・てんかん発作などの神経疾患、ネフローゼなどの腎疾患などのコモン疾病が大多数を占めた。けいれん重積、急性脳炎・急性脳症、髄膜炎、腸重積症、アナフィラキシーなどの緊急性の高い疾患も多数受け入れた。頭部外傷、臓器損傷、薬物誤飲などの外因系疾患も増加した。

4. 教育・研修・その他の活動

①教育・研修

当院の小児科専門研修プログラムが日本専門医機構に承認され、基幹型病院として新制度による小児科専攻医の専門研修を実施している。平成 30 年度本院採用の小児科専攻医は 4 名であった。

初期研修医延べ 18 名、小児科専攻医・後期研修医延べ 10 名、千葉大学病院総合診療科の専攻医延べ 2 名の小児科研修が実施された。千葉大学医学部学生 8 名の小児科実習を行った。平成 31 年度末で千葉市小児科医会と共催している海浜病院公開カンファレンスは 257 回を迎えた。

②その他の活動

千葉市の4か月健診、大網白里市の4か月健診、学校心疾患二次検診、細菌尿検査精密検診に参加した。千葉アレルギーネットワーク（特定非営利活動法人）主催アレルギー大学、青葉看護学校、消防局の講義に講師を派遣した。千葉市要保護児童対策地域協議会実務者会議に6回参加した。子どもの病気と家庭での対応について千葉市市政出前講座を開催した。

5. 1年間の総括

前年度に比し、新規入院患者数(2,291→2,083)とやや減少したものの、救急車搬送受入数(1,564件→1,724件)は増加した。断らないで受け入れる体制が整備され、軽中等症の外因系疾患も応受していることが主要因と思われる。それに伴い養育支援、虐待対応の件数も増加した。小児科の関連領域である小児外科、形成外科、泌尿器科、脳神経外科の診療も開始され、自院で管理できる小児疾患の幅が広がったことも関係している。新たな専門医制度が開始され、連携施設間での専攻医の交流などが始まり、これまで以上に活気がある雰囲気であった。

6. 今後の目標

次世代の小児医療を担う医師を育成するため、小児科専門研修施設としてよりいっそうの充実を図る。小児医療において問題となっている移行期医療や社会的養護を要する貧困や虐待などの対応、重症心身障がい児者のケア、発達障害・精神・行動・心身医学的な診療に対し、地域の需要に応えられるように整備していく。

小児科 HP : http://www.city.chiba.jp/byoin/kaihin/shinryou_syounika.html

海浜病院リクルートサイト : <http://chibacity-kaihinhp-recruit.jp/>